

週刊新潮

3月15日震災1周年追悼号
特別
定価390円

特集
ワイド

夜明け前の吊鐘

10



盛岡市を拠点に支援活動を行なう「SAVE I W A T E」の漆戸朗夫物資部長が語る。

「被災者の方々からは、特にお豆腐が喜ばれました。昨年6月から今年2月末まで、1万丁を無料配布していますよ」

盛岡市内の豆腐メーカー

トルコのウズラ豆缶2万個、イタリアの乾燥パスタ10ト、韓国のインスタントラーメン13万袋……。世界中から届けられた大量の救援物資には被災地ばかりか、日本中が感謝した。なかでも、一番喜ばれたのは、南米パラグアイから送られた意外な物だったのだ。

「最初の3カ月くらいは、被災者の方々もおにぎりやパンくらいしか口にできませんでしたから、豆腐をお届けすると、津波の後、初めて食べられて嬉しかった」と感謝されました。

平川食品は地元のみならず、他県の避難所にも車で出かけては豆腐を無料配布していた。

「最近も「本当に美味しい豆腐をありがとう」という札状を沢山頂いています」

なぜ、ここまで豆腐が喜ばれるのか。盛岡市の谷藤裕明市長が語る。

「盛岡市は、全国の県庁所在地の中で豆腐の消費量が

日本一。私も冷奴や湯豆腐にしてよく食べます。水が良いですし、良質なタンパク質を摂ることを目的にした内陸ならではの食文化が理由でしょう」

盛岡市民の豆腐好きの理由には、江戸時代の南部藩主が京都などから優秀な豆腐職人を招いたことが初めて市内にスーパーマーケットが出来た際、安売りの目玉商品だったなど諸説ある。

活力源の無臭にんにく
水素カルシウム主体の健康食品
スーパーバイタル慶寿を

にんにく製剤オキソレジン発売70年の
理研化学工業(株)が開発しました。

青森産にんにく無臭加工エキス末(約40%)、
 焼成Ca、マカ、冬虫夏草、田七人参、有胞子性乳酸菌、高麗人参、ガラナ、ロイヤルゼリー、エソウコキ、フランス海岸松、アルギニン、オルニチン、タウリン、BCAA、アスパラギン酸Na、スピルリナ、各種ビタミンと亜鉛が配合されています。

1袋(60カプセル)1ヶ月分 ¥2,980 **送料**
 2袋 ¥4,980 5袋 ¥9,980 **税込**

※初回のみ1袋 ¥1,980とさせていただきます。

0120-414-229 **ヨイヨ**
 平日9:00~17:30分迄 **ニンニク**
 FAX 075-643-4505(24時間待機)

発売 理研ヘルス(株) 京都市伏見区竹田高池町117

10 「パラグアイ」からやってきた一番喜ばれた救援物資

「被災者の多くはまだ腹物にも事欠く状態だった。」「安いサンダルなのですが、小さな子がそれを胸に抱きしめて持っていたのが忘れられませんでした」(稚子さん)

8月に避難所が閉鎖され、被災者が地元に戻ると、稚子さんらはアメリカなどから送られてきた物資を、被災地の幼稚園などに送り続けた。

稚子さんのグループは200名を超えるまでに増えている。妻たちの「トモダチ作戦」。それは、今も営々と続いているのである。



パラグアイからやって来た絆の品

平川食品の平川眞人社長に聞くと、

「最初の3カ月くらいは、被災者の方々もおにぎりやパンくらいしか口にできませんでしたから、豆腐をお届けすると、津波の後、初めて食べられて嬉しかった」と感謝されました。

「日本一。私も冷奴や湯豆腐にしてよく食べます。水が良いですし、良質なタンパク質を摂ることを目的にした内陸ならではの食文化が理由でしょう」

市商工観光部によると、一世帯あたりの年間消費量は103丁で、全国平均の約1.3倍に上る。

パラグアイの日系人

被災者から喜ばれた豆腐は、一体どこからやってきたのか。先の平川社長が説明する。

「岐阜県のギアリンクスという会社から昨年4月、加工委託の電話が来たのがきっかけです。2月末までに絹ごし豆腐を38万5000丁作りました。うちだけでパラグアイの大豆を約25トは使っていますね」

あの日、食糧輸入会社ギアリンクスの中田智洋社長は、現地視察でパラグアイにいた。同社の渡辺佳平さんによれば、

「震災直後、社長が現地の人達と何か出来ないか相談していると、イグアス農協の人が非遣伝子組み換えの大豆100トの援助を申し出てくれました。そこで平川食品などに協力を依頼し、1丁300トの豆腐を100万丁作る計画がスタートしました」

世界有数の景勝地であるイグアスの滝。1961年に日本人14家族がこの近隣に入植して密林を切り開き、広大な農地で大豆の生産を始めた。現在、彼の地には約750人の日系人・日本

人が住んでいる。

「100万丁計画は、2月22日に目標を達成しましたが、途中で1人でも食べられるようにサイズを小さく

したので大豆は残っている。それを使い切るまでは続けるつもりです。あくまでも善意の活動。無料で配っているの、3000万円の

赤字ですがね」(同)
地球の反対からやって来た大豆で作られた豆腐。被災者がこの味を忘れることはあるまい。

II 最も汗をかいた「政治家」 何もしない「政治家」ランキング

被災の不幸よりも被災後の不幸。国民を守るべき政治は混乱一途で、復興庁、除染、補償金……どれをとっても満足に機能しているとは言いがたいが、はたして国会議員たちは現場を見たのか？ 汗をかいたのか？

まずは震災発生直後のある民主党議員の動きを見てみよう。斎藤恭紀氏(現・新党きづな)は選挙区に仙台最大の被災地のひとつ、荒浜を抱える代議士である。「地元に戻る新幹線の中で

被災し、数時間車内に缶詰になりました。その後、栃木の中学校に避難し、翌日、改めて東京から同僚議員2人と物資満載の軽自動車で被災地に向いました」

「党が災害発生から72時間は混乱を防ぐため現地入りしてはいけないというんです。結局、地元に戻れたのは13日のことでしたが、そこには燃料も食料も衣料もない。この状況を国のど真ん中に伝えるのが代議士の

仕事だと思って、毎日毎日、避難所を回りました」

経過はどうであれ現場で汗をかいた議員はいた。がこの斎藤氏に言わせても、さらに上手、「おそらく一番」がいるという。宮城・気仙沼が地元の自民党、小野寺五典代議士である。その体験は確かに強烈であった。

遺体の搬出をした

小野寺氏は言う。

「12日の早朝、自分で車を運転して現地入りしました。まずは県の対策本部に出席し被害状況を把握。その後で家族を探しに行きました。体育館に避難していると聞いていましたからね」

「昨年5月22日に地元、二本松市で後援会の集会がありました。丁度、和牛の出荷停止騒動の頃で、展望を聞きたい時でした。でも彼女は私たちの訴えを聞くだけで、お話は国に伝えます」と言い30分で帰った。8月も放射能対策の集会があったが、話は「お見舞い申し上げます」と民主党はがんばります。ぐらいでしたね」

「週1ぐらいで国会に通いながら、2カ月間は井戸水を汲む生活でした。日中は対策本部や避難所を回って要望を聞き、支援者に頼まれば、安置所で遺体の確認も行った。瓦礫の中で捜索や遺体の搬出も手伝いました。夜は津波にやられながらもかろうじて残った自宅3階で毛布にくるまっています」

「去年の内に県知事なんかには会ったみたいだけど、被災地入りは今年になってから。なぜかって？ そんなの知りませんよ。裁判もあるし、先生もいろいろとお忙しいんですよ」

「週1ぐらいで国会に通いながら、2カ月間は井戸水を汲む生活でした。日中は対策本部や避難所を回って要望を聞き、支援者に頼まれば、安置所で遺体の確認も行った。瓦礫の中で捜索や遺体の搬出も手伝いました。夜は津波にやられながらもかろうじて残った自宅3階で毛布にくるまっています」

「去年の内に県知事なんかには会ったみたいだけど、被災地入りは今年になってから。なぜかって？ そんなの知りませんよ。裁判もあるし、先生もいろいろとお忙しいんですよ」

汗の量で議員歳費は変わらない。でも地元有権者のランク付けは、もう終わっているはずである。



議員多忙につき……(上から小沢一郎氏、太田和美氏、小野寺五典氏)